弘学時報

第 95 号
（年４回発行）
編集発行
弘前学院大学
広報委員会
印刷所
㈲小野印刷所

2024年度 入学式挙行

４月３日（水）、２０２４年度弘前学院大学並びに大学院の入学式を行いました。今年も式は、新型コロナウィルス感染拡大を排除するため、ご来賓の方々の参列をご遠慮して頂き、入学生と保護者の皆様の参列で、式次第も簡素化して行われました。文学部第54回、社会福祉学部第26回、看護学部第17回、大学院社会福祉学研究科修士課程第22回および文学研究科修士課程第20回、総勢名１４６の学生が入学されました。

二〇二四（令和六）年度 入学式式辞

学長　藁科　勝之

今年の雪は、昨年の大雪から一転して少雪になり、雪解けも早く、桜も開花が迫る季節、弘前学院大学に、新たに若い皆さんをお迎えできたことを、大変嬉しく思います。

皆さん、御入学、おめでとうございます。

本年度の入学手続き者は、以下のとおりであります。

・文学部71名、うち、英語英米文学科33名、日本語日本文学科38名。
・社会福祉学部・社会福祉学科44名。
・看護学部・看護学科30名。
・大学院－文学研究科１名。

総計、１４６名の皆さんをお迎えすることができました。

新型コロナ禍は、もうこれで５年目になります。ようやく沈静化している気配が見えますが、未だ罹患者が出ている状況から、感染を極力排除するために、残念ながら来賓の方々のご参列を見送ることと致し、保護者・同伴者の皆様や入学の皆さんと教職員のみの入学式となりました。

さて皆さんは、この３年間の高校生活は、コロナ感染の中で、必ずしも自由とは言えない生活環境 勉学状況であり、なかなか思うに委せず、もどかしい状況だったと思います。しかし、それを乗り越えて今日のこの日を迎えました。

弘前学院は、本多庸一（津軽藩藩校の稽古館の取締役）によって明治19年に設立され、キリスト教の精神を基に「畏神愛人」を弘前学院の建学の精神としました。弘前学院は、その母体が創設されて、今年で１３８年になります。

さて、これから大学生活が始まるわけですが、皆さんには、自分の置かれた環境を享受してみることを進めたいと思います。理由の如何を問わず、自分が身を置くことになった環境は、それなりに自分の生き方が反映した結果として現れたものなのであります。

さて、大学での学びとは、どういうものなのか？

大学での４年間の学修、これを学士課程と言います。そして、その勉学の中で養われる力を「学士力」と言います。

ではこの「学士力」とはどんな力か？　おおむね４つあり、１つ目は「知識・理解」の力です。これは最も基本的な知識・理解力で、これが基盤です。２つ目は「汎用的技能」と言われる能力で、種々、様々な分野や領域にも通じて使える技とか能力・スキルです。具体的にはコミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決能力、などですが、これらは、職業生活や、社会生活でも必要とされる技能・スキルです。３つめは「態度・志向性」と言われ、具体的には、自己管理、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、社会的責任、生涯学習力、といった力で、４つ目が、総合的な学習経験と創造的思考力と言われるもので、これらの３つを統合して、何物かを創り上げて行く力です。

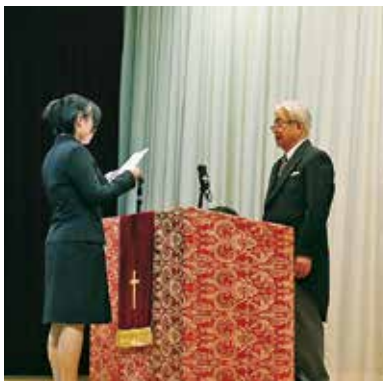
まず、皆さんにおすすめの言葉があります。それは「なじむ」です。

「なじむ」とは、平安時代からある古い言葉なのですが、この語源は、「馴れる」＋「沁みる」で、馴れ・沁むで、ナジムとなりました。漢字熟語で言えば「適応する」です。適応とは、随分固い印象を与える言葉ですが、「なじむ」の方は、適応よりも、柔軟で「しなやか」なニュアンスがありますね。「なじむ」ことによって、自分に自由さを感じられるし、自分の力がより発揮できるし、そこに自分を肯定できる価値が見いだされるでしょう。

皆さん、大学生活を始めるにあたって、４年後の自分の姿というものを、イメージしてください。漠然とでもかまいません。自分が何を目指したいのか、これを意識してみてください。そのイメージした姿の実現を目指して、これからのキャンパスライフを始めましょう。

私たちは、皆さんの「学び」に期待しております。

これを、皆さんの歓迎とお祝いのことばといたします。



特待生喜びの声

文学部　日本語・日文学科　2年　蒔苗　朋佳

この度、特待生を受賞することができたことを、本当に有り難く光栄に思います。

入学した当初の私は、大学という機関の仕組みに戸惑い、ただ目の前の事をこなすだけで精一杯でした。しかし次第にペースが掴めてくると、高校生までよりも学びが楽しくなっていました。足並みを揃えて進む高校までの学びと違い、やりたいことを自分で考え、選んで進む大学での学びに、やりがいを感じることができたのです。

また、高校生の頃までの私は、恥ずかしながら、自分の人生をつくり、歩んでいく自覚に欠けていたと思います。しかし、大学生として様々な事を決める場面が増え、その中で、自分の人生の舵取りは自分がするのだという自覚が芽生え、少しずつ、自分の人生に希望と責任感を持てるようにもなりました。

このように、特に精神的な面で成長することのできた一年であったと思います。

そして今、特待生を受賞したことで、成長を肯定していただけたような気がして、そういった意味でも本当に嬉しかったです。こんな私をこのような形で評価していただけるとは思ってもみませんでした。まだまだ至らない私ではありますが、これを励みに、これからも一層精進していきたいと思います。

社会福祉学部　社会福祉学科　2年　齋藤　愛生

今回、特待生に選ばれたことを聞いたとき、自身のこれまでの努力が認められたように感じて、一年間頑張ってよかったと思いました。授業形態や評価方法も今までとは大きく異なり、大学生活に慣れるのはなかなか大変で時間がかかりましたが、できる限り努力をしました。

私が大学生活で一番大変だったと感じたのは、考査期間でした。覚えなければならないことがとても多く、自分の力だけでは乗り越えられるものではありませんでした。私がこのつらい期間を乗り超えることができたのは、一緒に勉強してくれる友達がいたからだと心から思います。わからないところはお互い教え合い、協力しながら取り組めたので、考査期間だけど楽しく、また、一人で勉強するよりも効率が良かったのではないかと感じました。一緒に勉強してくれる友達とも、これからも共に頑張っていきたいと思いました。

看護学部　看護学科　3年　工藤　日陽

今回特待生に選出されたのは、大変嬉しく思います。これにより自分の向上心を高めることに繋がりました。これから実習や就職活動を控えていますが、最初の一年の頑張りを忘れずに継続し、少しでも自分に自信を持って行動できるようになりたいと思いました。

まずは、特待生に選出していただいたことに際し、いつも興味深い講義をしてくださる先生方、共に学ぶ友人、そしていつもそばで支えてくれる家族に、心より感謝申し上げます。

私は、養護教諭として児童生徒の心身の健康を支えたいという目標があり、そのための学修として、次の３つのことを心掛けています。まずは、講義の内容をしっかり理解することです。先生の説明を聞いて理解できたことは、その根拠や思考過程を資料に書き加えています。これにより、時間が経っても講義でどのように理解したのかを振り返ることができ、思い出しやすくなりました。

次に、課題に取り組む際は、できるだけ多くの本で関連する部分を読み比べています。

教科書と参考書で記載内容が異なる場合もあり、幅広く学ぶことができました。また、看護過程を展開する際には、課題に含まれていなくても必ず病態関連図を書いています。これにより、症状の成り行きや関連、検査データと治療の根拠を理解することができ、全体像を把握しやすくなりました。

最後に、後期からは対象者の心情に寄り添った看護を身に付けるために、これまで学んできた知識や技術を活用し、有意義な実習を行いたいと考えています。

二〇二四年度特待生授与者

二〇二四（令和六）年度の弘前学院大学特待生に、五月二十九日（水）十二時より賞状の授与が行われました。今年度の授与者は次の方々です。

◆文学部
２年　蒔苗　朋佳
３年　板谷　隆広
４年　佐藤　亜紀

◆社会福祉学部
２年　齋藤　愛生
３年　木村　美月
４年　芳賀　周平

◆看護学部
２年　嶋田妃華莉
３年　工藤　日陽
４年　石郷岡優花

＊一年生については、前期成績発表後の十月に授与予定です。

研究紹介㊾

～精神保健福祉を体験・学習・実践・研究して～

社会福祉学部　社会福祉学科　講師　大原　さやか

令和6年度に着任した大原さやかと申します。専門は「精神保健福祉」でグループホームの世話人を4年間、就労継続支援B型事業所（以下B型事業所）の生活支援員、サービス管理責任者として3年間、現場経験を積みました。そして、現場を通して得た疑問を研究テーマに設定して、研究の道へ進みました。

研究テーマは、修士課程では「B型事業所で働く精神障害者が、障害者雇用による一般就労移行に至る支援過程」を研究し、さらに博士課程では「B型事業所から一般就労移行に至る支援モデルを開発すること」を研究テーマにしています。これらをベースに将来的には、「B型事業所から一般就労に至るまで、当事者自身が目標を定めて希望を叶えていけるようなモデル」について介入調査にて研究していきたい思っています。

このような研究をテーマにしている理由の1つは、精神疾患を患った当事者が自分の人生を歩み出す、たとえそれが第三者から見て凸凹道かもしれないけれども、「挑戦する権利」をもって歩んでいけるような道筋が認められる世の中であってほしいと思うからです。もう1つは私自身が精神疾患からの回復者であることも理由としてあります。「挑戦する権利」を失わずにどうにかやってこれた、ここからも歩んでいこうと思う私自身にも突きつけられている研究テーマだと思っています。

また、社会活動として「精神医療国家賠償訴訟研究会」にも所属しています。病状は消失にしているのにもかかわらず、精神科病院に長期入院を強いられてきた患者を原告として、国の政策の不作為を問う裁判を起こしており、それを応援しています。長期入院は地域で生活する機会や自分の人生を歩む権利を奪ってしまいます。凸凹道を歩む権利を与えないという点において、私の研究テーマにも触れていると思っています。

同時に、プログラム評価を普及しようとする団体にも関わっています。「評価＝Ex value（価値を外に出す⇒引き出す）」という意味合いでの評価活動を行うことで、自分たちの行っている実践を可視化し、よりよい実践を可能にしていくことは勿論ですが、理をもって生きていくためのお手本として、実践家のみならず当事者にも普及していく必要性を感じています。

弘前に来て3カ月。まだまだ慣れないことも多いですが、自分自身のペースを守りながら少しずつ馴染んでいければと思っています。どうかよろしくお願いいたします。

談話室

メンタルについて

看護学部　看護学科　准教授　菅原　大輔

精神疾患は誰にでも罹りえる病気であり、世界保健機構では世界のうつ病患者は3億人を超えたことを報告している。我が国においても有病率が5・6％と増加をたどっており、その要因の一つに「スマホやパソコンなどの電子機器使用の増加と睡眠障害の組み合わせ」が大きいことが厚生労働省より報告されている。

さらに、精神科医であるアンデシュ・ハンセンは著書である「スマホ脳」や「メンタル脳」にSNSと孤独がメンタルを下げることを言及している。つまり、世界中とつながることができるSNSだが、直接的な接触がない場合だと逆に孤独を実感しやすいことを示している。

急激なIT業界の躍進により個人がSNSを通じて世界とつながりを持てる時代が到来している。その観点から考えると孤独から大きく離れ、対人交流が活発化していると思われる。しかし、10代の男女の50％近くが心配と感じ、さらに腹痛や睡眠障害といった長期的なストレスの症状を訴えており、徐々にうつ病に移行するケースも報告されていることから、孤独を感じている人が増えている現状が見てとれる。そして、コロナ禍においてソーシャルディスタンスが推奨され、過度な接触はもちろん、物理的な距離の制限を余儀なくされた。これらの出来事から、対人交流における距離感の調整が複雑になり、適度な交流が難しいと感じている人も多いのではないだろうか。

米国で大学生150人を対象にスマホやパソコンなどの使用時間を1日最大30分に限定した研究によると、1ヵ月以内に気分の落ち込みや孤独感が減少し、さらに睡眠時間が延び対人交流（接触）も増えた学生が多数確認されたと報告している。

SNSの利用制限と現実的な対人交流の時間を増やすことが適切な対応だと様々な著書に記述があるが、筆者としては自然との接触も増やすなど、自分なりに「デジタルデトックス」の形を模索することも現代社会では求められていると感じている。

10年を経て成長したブナ

看護学部　看護学科　講師　小野　綾

2013年、弘前学院大学看護学部に植樹された一本のブナ。その時はまだ小さな苗木だったそのブナが10年の歳月を経て少しずつ成長しています。この植樹は「ジャパン・ブナ・フェスティバル実行委員会」（根深誠委員長）の主催で行われました。白神山地の世界遺産登録20周年を記念して行われたもので、関係者が集い未来への希望と期待を込めてこのブナを植えました。当時はまだ小さな苗木でしたが、その姿はこれから社会に羽ばたく学生たちのようでした。彼らの手で丁寧に植えられたブナは、その後の学びと成長を象徴する存在となりました。

四季折々の変化の中で、ブナはゆっくりとその姿を変えていきました。春には新緑の葉が芽吹き、秋には黄色や褐色に色づき、冬には雪に覆われた枝が静寂をもたらしました。ブナは、毎年少しずつその成長を見せてくれました。ブナは現在、看護学部玄関の前に並んで植えられています。学生たちは、毎日キャンパスの出入りの際にこのブナを目にし、その成長を見守っています。学生たちにとって、このブナは日々の風景の一部として親しまれてきました。

2024年、ブナはまだ人の背丈を少し超える程度ですが、その姿には学生たちの努力と成果が重なり合っています。この10年間、ブナは風雨に耐え、厳しい冬を乗り越え、着実にその根を張り巡らせてきました。その姿には、人生の困難を乗り越え成長する力強さが感じられます。このブナのように私たちも成長していかなければなりません。このブナが育ったキャンパスは、看護学部の学生たちにとっての学びの場であり、成長の場でもあります。ここで学んだ知識や経験は、彼らの人生において大きな力となるでしょう。そして、ブナの成長が示すように、困難を乗り越えた先には必ず実りがあることを、学生たちは知っています。

弘前学院大学看護学部のブナは、これからも変わらずに成長を続けることでしょう。それは、新たな学生たちにとっての希望と励ましとなり、卒業生たちにとっての誇りであり続けます。この10年という時間の中で育まれた絆と共に、ブナはこれからも未来へと向かって成長し続けるのです。

2024年ヒロガク教養講話の概要

文学部　英語・英米文学科　講師　スティーブン・マックウィニー

ヒロガク教養講話とは、新入生にさまざまな幅広い情報を紹介することを目的として開催されます。実践的な事柄についての理解を深めたり、いろいろな講話を通して学生の成長を促すことなど、さまざまな講義形式で学生を支援します。

今年の教養講話は、弘前学院大学　学長　藁科　勝之先生から始まりました。「新しい国づくりそのコトバ　～中国在住宣教師館の著作と幕末明治の日本～」という演題の講義でした。日本が新しいアイデアを導入したときに直面した困難と、現代日本語で使用されるようになった単語の数を学生に紹介しました。

ナルミ医院　院長　鳴海医師が「将来の目標や夢を実現するために必要なこと」という演題で学生たちに健康について教える講義をしてくださいました。喫煙の危険性と、砂糖や塩を過剰に摂取することの問題についての説明がありました。

青森中央学院大学講師、榮田育子先生は「大学生が今知っておきたいお金の話し」という演題で講義してくださり、学生たちにお金について考える機会を与えてくれました。自分のお金を管理することがいかに重要かという話題は、大人としての責任を持つことの学生への警告ともなりました。最後に、学生が経済的困難に直面した場合に使用できる多くのリソースを紹介してくれました。

青森県弘前警察署生活安全課長が、風俗営業に関する法律について講義しました。学生たちに、遭遇する可能性のある危険について注意喚起してくださいました。

日本年金機構の弘前年金事務所は、年金制度についての講演を行い、その重要性や学生が将来の財務計画を立てるための準備について説明しました。

弘前圏地域移住交流デザイナー・弘前大学非常勤講師　野口　拓郎先生は「移住・定住という視点で今後のキャリアを考える」という講義をしてくださいました。県外で働き、帰国することを決意した学生に対して、どのような支援プログラムを実施しているのかを説明しました。自分の経験に基づきながら、弘前に住むことに決めた人々の例を取り上げ、その決断の経緯を説明しました。

JICA東北（国際協力機構）の担当者がJICAの活動について説明しました。JICAの現状や将来どのように応募できるかについても説明を受けました。

株式会社アルク　代表取締役小山内　和寿氏はアルクについて紹介しました。会社のさまざまな特徴について説明しました。「アイデアを出せ！自分を出せ！」というテーマのもとに、説明してくださいました。

社会福祉法人「あーるど」理事長　大橋一之先生は、起業に至った経緯を語ってくださいました。「あーるど」でどのような仕事をしているのか、また、障がい者のためのそのような場所が今後ますます重要になることを説明しました。

この後の教養講話の予定講演者としては、弘前学院大学の客員教授三上聖治先生が講演してくださいます。元NGOボランティア従事者の穂積夏子氏は、自身のボランティア活動の経験とその影響について講演を行います。医療法人三良会村上新町病院院長吉岡利忠氏は、医療に関する講演を行い、健康と福祉の維持について貴重な情報を提供してくださると思います。最後に特別講義があります。自衛隊の方々が来てくださる予定です。

この一連の講演は、弘前学院大学の学生に貴重な知識と経験を提供し、学業の充実とプロとしての未来に向けた準備を担っています。

2024年度英語・英米文学会総会・新入生Welcome Partyについて

４月23日（火）に、１号館の４階大講義室で２０２４年度の英語・英米文学会総会と新入生Welcome Partyが開催されました。英語・英米文学科の学生89名と教員８名の参加がありました。総会では、２０２３年度の決算報告や活動報告の後、２０２４年度の学会予算案や行事案、さらには学会の新役員案が出され、満場一致で承認されました。今年度の学会イベントは、以下のスケジュールで進められることが決定しました。

２０２４年
６月23日：三沢市であるAmerican Dayに参加
８月３日：English Camp
10月13日：ヒロガク祭でイベントを行う
10月25日：ハロウィーンパーティー
11月中　英語・英米文学会講演会
12月６日：クリスマスパーティー
２０２５年
１月25日：４年生卒論ポスター発表会・４年生お別れ会

また、昨年度の英語・英米文学会学会誌が完成しました。学会誌は以下のＨＰで閲覧できます。http://www.hirogaku-u.ac.jp/faculty/bungaku/activty/e_literature/。

総会終了後には、新入生Welcome Partyが行われ、学生たちはいくつかの学年混合のグループに分かれ、先輩と後輩の間の壁もなく楽しく懇談しました。それぞれの自己紹介の後、新入生たちは先輩に学生生活やアルバイト、クラブ・サークル、勉強などについて質問し、先輩から色々なアドバイスを受けていました。このWelcome Partyはドーナツを食べながら懇談することが恒例となっており、ドーナツパーティーとも呼ばれます。学生たちはドーナツを頬張りながら、短いながらもリラックスした交流の機会を楽しんでいたようです。

文学部主催のイースターパーティー！

２０２４年５月24日（金）、文学部主催のイースターパーティーを行った。文学部の学生44名、英文科の教員８名が参加した。３つのアクティビティ、イースターにちなんだフードやドリンクで楽しい時間を過ごした。

パーティーの前に、イースター気分を盛り上げるため、英文科の学会委員はラーニング・コモンズをウサギや卵など典型的なイースターの装飾で飾った。パーティーのはじめに、石垣先生が聖書の一節を読んでくださり、イースターについてのお話しをしてくれた。イースターとは十字架にかけられて亡くなったイエス・キリストが、３日後に復活したことを祝うお祭りである。そして、イースターの日時は、春分の日の後の最初の満月の次の日曜日のため、その年によって日時が定まっていないということを知ることができた。このイベントは、キリスト教精神に基づいた教育という大学の目標に沿うもので、一般的に行われている西洋の文化的行事をよりよく理解できるようにする機会であった。

１つ目のアクティビティは、アメリカでイースターの時期に食べられるハムを使ったサンドウィッチを食べた。イースターハムは、伝統的なアメリカの休日のメインコースとして、感謝祭の七面鳥に次ぐものである。このことから、普段あまり触れることのできないアメリカの食文化について触れることができ、とても良い体験となった。ハム・サンドウィッチを食べながら、アメリカでイースターの時間によく見るスヌーピーアニメ「イースター・ビーグル」を観た。

２つ目のアクティビティは、ガラス瓶の中のアメの数を当てるゲームだった。アメの数について最も近い予測ができた学生は、その瓶をもらうことができた。今年のゲームに勝った学生はコラムビアからの留学生ジョアン・マヤさんとルカス・リベラさんだった。

３つ目のアクティビティは、イースターエッグハントである。学会委員が約４５０個のエッグを1号館の1階から4階に隠し、学生はそれを探した。その中には金色のエッグ、半分が金色のエッグ、カラフルなエッグがある。エッグの中にアメリカのお菓子が入って、アメリカのエッグ・ハントの経験をすることができた。

１年生が入学してから、初めてのイベントだったため、楽しんでもらえるように話し合いを重ねながら、イベントに臨んだ。これからもまだまだたくさんのイベントがあるため、皆で盛り上げられるように頑張りたい。

父母と教職員の会総会報告と年間行事のお知らせ

六月八日（土）、本学にて二〇二四年度父母と教職員の会総会が開催されました。総会では、以下の議案について話し合われました。

〇第一号議案
二〇二三（令和五）年度活動報告及び収支決算報告について

〇第二号議案
二〇二四（令和六）年度活動計画（案）及び収支予算（案）について

〇第三号議案
役員改選について
なお、役員については次のとおり決定されております。
会　長　平間　順司（新任）
副会長　西川いつ美（留任）
監　事　加福千枝子（留任）
監　事　下山由香里（留任）
顧　問　藁科　勝之（留任）

今年度の父母と教職員の会の年間行事は以下の通りです。

〇六月六日（木）
学内常任委員会
〇六月八日（土）
役員会、総会
〇一〇月一二日（土）
父母懇談会
（弘前会場　第一日程）
〇一〇月一三日（日）
父母懇談会
（弘前会場　第二日程）
※学祭と同日開催
〇日程調整中
父母・教職員研修会
※父母・教職員研修会については、日程が確定次第、別途ご案内をお送りします。

人事異動

◆新任紹介

文学部　教　授　神戸　直樹
准教授　山本　尚樹
講　師　遊佐麻友子

社会福祉学部
講　師　大原さやか
助　教　宮田　将希

看護学部
教　授　日下　純子
准教授　三浦　雅史
助　教　村上　優人
（七月一日付採用）

事務職員
アドミッションセンター長
緑川　勝利
アドミッションセンター職員
塩﨑　莉子

◆異　動

法人本部　財務課
（大学　総務課より）
鳴海　誉
キャリアセンター長
（アドミッションセンターより）
福原　直樹
総務課
（アドミッションセンターより）
今　優希奈

看護学部総務課
（アドミッションセンターより）
成田ひらり
看護学部学生・就職課
（学生・就職課より）
古川ありさ
アドミッションセンター
（看護学部学生・就職課より）
中田麻衣子

◆退　職

文学部　教　授　佐藤　和博
講　師　齋藤　章吾

社会福祉学部
教　授　葛西　久志
講　師　柘植　秀通

看護学部
教　授　舘山　光子
教　授　三上　聖治
准教授　川村　泰子

2024年度 新学部長・学科長・主任紹介

◆文学部

学部長　鎌田　学
日本語・日本文学科長
坂井　任

◆社会福祉学部　社会福祉学科

学部長　西東　克介
学科長　藤岡　真之
学務主任　高橋　和幸
学生主任　駒ヶ嶺裕子

◆看護学部　看護学科

学部長　高田まり子
学科長　田中　真実
学務主任　宇田　宗弘
学生主任　大瀬富士子

◆大学院

文学研究科長　今村かほる

新入生の夢と希望

理想の自分

文学部　英語・英米文学科1年　伊藤　千乃

今は、自分の夢を答えられる人が少ないらしい。時に、私たちの大学では教育教員免許を取得できる。それほど教師になりたいという願望はなくても、とりあえず取得しておこうと考える人も少なくないだろう。

例えば、日本語・日本文学科の人たちは、国語科の教員免許を取れるわけだが、私自身その道に進む勇気はなかった。簡単に言うと、私が日文に行かなかった理由は、自信がなかったからだ。私が、中学高校で教わった先生方は、素晴らしい人ばかりだった。落ち着いていて、立ち振る舞いや姿勢、字もきれいだった。きっと理想の人というのはこういう人のことを言うのだろうと思った。とりわけ、こういう人になれ、というのはないと思うが、それを目指すのが私にとってベストだと思った。

私は中高の時、あれほどお世話になった先生方に何にも返すことができなかった。自分の話を聞いてもらってそれっきり。私はあまりこういうのを書くたちじゃない。皮肉のない文章は書けないし、当たり障りのない文を書くことも少ない。だが今回書こうと思ったのは、こういうのに載れば中高の先生たちが見るかもしれないと思った。少しだけ、恩を返せると思った。私にとって今までの学校生活で不思議だったのが、先生たちが私たち以上に喜んでいるということだ。というのも、私たちが何か大きなことを任されたり、それを成し遂げたりすると、とても喜ばれていた。そんな人に私もなれるだろうか。

私は話を書くことが好きだ。エッセイなどを書くときに、自分の経験を思い返してみることがある。だが、思い返すとエピソードは先にわいてこない。その時の感情から湧き上がってくる。あの時悲しかった。うれしかった。羨ましかった。それから、なんで悲しかったんだっけ。というように、それはどんな記憶なのかを思い出して書いていく。人間不思議なもので、悲しかった思い出のほうが、存外残っている。ここまでくるとわかるだろうが、私は小説家になりたかった。だが、私は今、英文科に所属している。入学面接のときも「ではなぜ、日文にしなかったのですか。」と聞かれた。答えは自信がないからだけではない。自分の作品をより多くの人に知ってもらいたいからだ。英語は日本語より表現の幅が狭いから、伝えたいことを伝えるには、自分で英語を学んで書くのがいいと思った。そのほうが、誰かに訳してもらうよりも伝わるだろうと思った。

私も自信がないため、胸を張って、夢を声に出すことはなかなかできないが、とりあえず学生である今は、希望を持ち続けたい。改めて分かったことがある。それは、恩を返さなければならない人がたくさんいるほど、私は周りに恵まれていたということだ。

有意義な学生生活を過ごすために

文学部　日本語・日本文学科1年　山内　莉里

大学に入学して約３カ月が経った。学生生活にもかなり慣れてきたが、これから試験やレポートの提出も増えるので時間を無駄にせず、計画的に勉強を進めたい。普段の講義を真剣に受けることを前提として、専攻している分野以外も積極的に勉強し、幅広い知識と教養を身につけ、人間として大きく成長したいと考える。また、いままでは自分が好きな作家の本しか読んでこなかったが、色々なジャンルの本を読み、表現力や想像力、語彙力などを豊かにできたらよいと思う。

私は将来、地方公務員になりたいと考えている。地域社会に貢献し、生まれ育った街をさらによくしたいと思うからである。公務員は職場の人だけでなく、市民ともかかわって業務をするため、円滑なコミュニケーションとわかりやすく説明するための論理的思考力が必要であると考える。そのために友人や先輩、教員とのコミュニケーションを大切にし、人間関係を築いていきたい。高校生の時に比べて、時間的にかなり余裕があるため、大学での勉強以外にも様々なことに挑戦したい。１つめはアルバイトである。高校時代はアルバイトができなかったため、自分の向き不向きを知るためにも様々な業種のアルバイトを経験したい。アルバイトは多様な人とかかわるよい機会である。交流を通して様々な価値観に触れ、視野を広げたい。さらにアルバイトを通して、社会常識やマナーを身につけ、コミュニケーション能力、主体性なども高めたいと思う。２つめは資格取得である。就職活動時には地方公務員試験と民間企業の採用試験も受ける予定である。そのため、就職活動で少しでも有利になるために、早い段階からＦＰ技能検定や日商簿記、ＩＴパスポートなどの勉強も始めたい。また、就職後の人生を豊かにするためにも、仕事に直結しないとしても興味がある資格は進んで勉強したいと思う。

社会人になると仕事に追われて自分のための時間はなかなか確保できないだろう。いまのうちに時間を大切に使うくせをつけ、学べていることに感謝を忘れず、有意義な学生生活だったと思えるように日々勉強していきたい。また、社会に出て恥ずかしい思いをしないためにも、４年間を充実したものにし、自分が満足できるような進路に進めればよいと思う。

将来の夢と目標

社会福祉学部　社会福祉学科1年　森　絆菜

私の将来の夢は、一人一人に寄り添うことができる特別支援学校教員になることです。母と将来について話したことがきっかけとなり、この職業を知りました。実際に特別支援学校とはどのような学校で、また、その学校での教員の役割とはどんなことをするのかを知りたくなって、中学２年時に青森第二養護学校の文化祭「二養祭」を見に行きました。そこでは、生徒がステージ発表の途中で走り回ったり、奇声を発していました。その時、隣で背中をさすって寄り添っていた教員の姿に、私は強い憧れを抱きました。

また、障がいをもつ子たちに寄り添うだけではなく、勉強面でも生徒に寄り添えるような特別支援学校教員を目指したいと考えています。私自身、昔から勉強が苦手なので、勉強への苦手意識を持つ生徒の気持ちが痛いほど分かります。だからこそ、生徒の気持ちを１番に優先して、一人一人にあったレベルでサポートし、生活面だけではなく、勉強面でも生徒に寄り添える教員になりたい、と強く思っています。

そして、私にはもう１つ夢があります。それは、障がいの有無に関わらず誰でも楽しむことができるスポーツを通じて、障がいの壁をなくしたいという夢です。高校３年時に、青森県特別支援学校総合スポーツ大会のボッチャの運営補助のボランティア活動をしました。そこで初めてボッチャというスポーツがあるということを知り、またボッチャは障がいの有無に関わらず誰でも楽しむことができるスポーツだと感じました。ほかに、点字ブロックリレーやツインバスケットもあります。このような運動を通して、一緒に楽しむことができるだけではなく、健常者に障がいを理解するきっかけ作りをすることもできるのではないかと考えます。具体的には、スポーツイベントの開催や、特別支援学校と近隣の学校の交流会を計画してみたいです。

大学においての講義ももちろんですが、私は、ボランティア活動からも学んでいきたいです。青森第一養護高等学校の文化祭のボランティア活動に参加した際、肢体不自由のために車椅子を使用する生徒と一緒に文化祭を見て回る経験があり、そこから生徒と同じ目線になって話すことが１番大切だということを学びました。これからも様々なボランティア活動に参加して、特別支援学校教員の素養を少しでも身に着け、障がいの壁をなくしたいという強い志を持ち、なおかつ探求心も持って大学４年間学んでいきたいです。

～看護師から助産師へ～

看護学部　看護学科1年　高橋　里桜

私の夢は助産師になることです。しかし、最初は看護師を目指していました。私の母が看護師ということもあり、小学生の時から自然と看護師という仕事を身近に感じ、気づくと看護師になることが夢になっていました。中学でもその目標は変わることはありませんでした。そんな中で私が助産師を志すきっかけとなったのは、高校生のときです。高校二年生のときに突然、父が急性心筋梗塞で亡くなりました。私はいつも身近にいた存在の父がいなくなってしまったという喪失感で何に対しても気力が湧かなくなってしまいました。そのときに初めて人が亡くなる、人の命が終わるということを大きく実感したのと同時に、看護師はどんなに頑張っても救えない命があること、人の死を受け入れなければいけない仕事だということに恐怖を抱くようになりました。身近な人の死というものを経験したあとだったからこそ、看護師になってから精神的に耐えられる自情がなくて何度も何度も看護師になることを諦めた方が良いのかと考えました。そんな中で、担任の先生に高校生を対象とした看護体験に行ってみないかと勧められ、行くことになりました。その体験の中で患者さんと実際にお話をしたり、看護師さんに仕事の内容を見せてもらったりしたときに人と直接的に関わることの楽しさややりがいのある仕事であることを肌で感じることができました。そして、今自分の悩んでいることを看護師さんに相談したときに「私は助産師の資格も持っているんだけど、看護師だけじゃなくて他の医療の仕事にも選択肢広げてみたら?」と言われてから、選択肢を広げるようになり助産師にも興味を持つようになりました。今では、助産師として妊婦さんの出産・育児のケアを一番近くでサポートするとともに人の命が誕生する、命のスタートする現場に携わりたいと思っています。

大学に入学し、少しずつ夢に近づいていく中で小学生の時から目指してきた看護師の勉強をすることができている嬉しさと、新しいことを学ぶことの楽しさをとても感じています。これから助産師になるまでには、たくさん悩んだり苦しんだりすることもあると思いますが、楽しさと喜びを感じながら勉強をしていきたいです。そして多くの人と関わる中で、様々な物事の見方や考え方があることを知り、人としても成長できるように頑張ります。